

六月十九日

しばらく振りの土曜日の午後、ズーツとためていた机の上の手紙その他を整理していたら石井和紘さんからの活字葉書があった。活字のものだからここに記しても良からうと考えて内容を記すが、近況報告の形をとっている。要するに矢沢永吉風の金のトラブルに巻き込まれていたが、ようやく脱け出た。これから再び出直すぞという内容である。石井和紘さんには身軽になってもう一暴れしていただかないと、建築界は無風状態のまんまだ。ベタなぎ状況は私にとっても好ましいものではない。それ故、開放系技術・デザイン主義で一石を投げようとしているのだから。主義、主張や趣向は異なっている、もう一つや二つの波風の素があっても良いのだ。だからと言って、石井さんと何か御一緒というのはもう無い。それでも時代は廻り続けている。無風状態のまんま廻り続けていて、その速力は速く、強い。この無為の速力こそが今の主題だ。週に半日位こういう時間を持つのは悪くないのだが、自省的になり過ぎるのも良くないしなあ。

十七時半聖徳寺関係の書類がまとまったので大学発。只今京王線車中。石井和紘さんの活字葉書が妙に気になって、車中で読み直してみる。普通の人間は決まてこういふ葉書きは出さない。でも考えてみれば、附合いが始まった三〇才の頃から石井さんはこういう文体の人であった。人間は何があっても変わらぬものだ。記して石井和紘さんの健闘を祈りたい。二十一時四〇分西調布駅

森川と待ち合わせ。途中原口氏と出会い、お茶。二十二時半中川さんと打合わせ。二十四時前森川を帰す。結局翌日二時前迄色々な話しをした。友部さん栗畑君と富士嶺観音堂及び墓地のビデオを何回も見る。画面に不思議な光が溢れ、走り、幻想的な風景が撮られている。これ迄作ってきたモノとは少し違うなというのを我ながら実感した。少し体に元気が戻ったような気がする。二時二〇分世田谷村に戻る。

六月二〇日 日曜日

今日は日曜日らしく過そうと考えた。午前中、世田谷村ゼミのプログラムを考え、ある程度の結論を得る。これで明日のゼミを開講できる。自転車操業だね。十四時烏山北口の原口さんと待ち合わせて、コーヒーショップで雑談。十五時三〇分迄。何の目的も、思惑もない附合いは良い。成城迄小バストリップをするという原口氏と別れ、世田谷村へ戻る。夕方、エドワード・W・ソジヤ、ポスト・モダン地理学を持って、烏山のジャズ喫茶ラグ・タイムへ。ベーシーと比べれば他愛の無いところだが、又、来てみよう。夕食は宗柳でソバ。ビールを少々。

六月二十一日

昨日午後から、小猫が一匹世田谷村の住民として加わった。体長二五センチメートル程の白い小猫である。友美の勤め先の上司の知り合いのところから来た。白い、両眼の色がちがう仲々美形の猫だ。ウサギのツトムが新参のイワノフという名前らしい猫の登場で、妙に悠然とした態度つまり先輩顔した風をとり始め、おかしい。まるで人間社会と同じだ。昨夜はこのイワノフが泣き続け、おまけに山田脩二から又夜中に電話があり、よく眠れなかつ

た。山田脩二はこれから、行くかと言つので、それは御勘弁下さいという事にした。私もそんなに体力があるわけではない。しかし、イワノフと山田脩二にはこれからも悩まされるのであろう。

九時下の原っぱで世田谷村開放系技術ゼミナール。二〇〇四年の方針を伝え、各自の希望を聞く。このゼミが破綻するようなら、私の教育はもう無いな。十二時修了。昼食肉マンニケとミルク、さびしいモノである。清貧だな。午後、山田脩二の事が気になり、十八時新宿高島屋十三階のソバ屋で会う。結局、山田脩二は世田谷村まで来た。私は途中で寝てしまったが、家内が深夜まで附合った。何時迄山田さんが世田谷村に居たのか知らぬ始末であった。誠に面ほくない。山田脩二は今、六十五才。我々は老いてゆく事が実に下手だ。